

○ 研究ノート

1 『八千代市の歴史 資料編』未掲載の市内板碑データ —下高野・上高野などの板碑について—

藤 由美

はじめに

八千代市内の板碑については、平成3年(1991)刊行の『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』(注1. 以下『資料編』と略す)に149基の板碑のデータは集録されていて、それぞれの属性がわかるようになっている。

その後の「追加調査で25基がふえている」と、平成20年(2008)『八千代市の歴史 通史編 上』(注2. 以下『通史編』と略す)で報告されているが、その25基の詳細なデータはまだ報告されていない。

八千代市の板碑研究をリードされ、その全数の集録を志されてきた本会の村田一男顧問におかれては2021年8月にご逝去されました。

村田顧問のご遺志で、本号で2020年の神野の新発見の板碑121点の詳細を筆者が掲載するにあたり、追加調査25基データも参考にして市内板碑の全体の分析を試みようとしたが、まとまった資料がなくて、残念ながら力及ばず、25基の内容について把握されていた村田顧問にお尋ねしておけばよかったと悔いるばかりであった。

とりあえず2021年9月時点で、25基のうち筆者が把握できた下高野・上高野・島田台間見穴遺跡などの20基の現状について報告し、将来、八千代市内板碑の全数のデータ集録をする際のための覚書としておきたい。

1. 八千代市内の平成期の追加調査25基の内訳

八千代市の板碑は、『資料編』の「第二章中世 九 金石文」に、146基の「武蔵式板碑」と3基の「下総式板碑」の計149基の板碑について、それぞれの所在地・法量・銘文・種字、および蓮座と花瓶の有無の個別データ、6基の拓影が収録されている。

さらに『通史編』では、「第五章第二節 市域の板碑」の項に、追加調査で25基が増えて、刊行の時点で171基の板碑が確認されていると報告されているが、追加調査分25基については、『通史編』同第二節の表3に「八千代市板碑一覧表」の中に、所在と基数、紀年銘と、年号有りの数と年号不明数、無刻数、合計数などが合算されて記載されているのみで、1点ずつの個別データは載っていない。

平成3年から20年まで、個別データ未掲載の追加分25基の内訳は、表1の通りである。

このうち、「T 米本・長福寺」の5基は、『資料編』に「板碑の形はしているが何も彫刻されていないもの」として、但し書きに一括掲載されていたものである。

表1 市内板碑調査の追加分の内訳（平成3～20年・『八千代市の歴史』に個別データ未掲載）

	所在	年銘（追加分のみ）	年号有数	年不明数	無刻数	合計
T	米本・ 長福寺		(*15)	(*4)	5	5 (*24)
V	村上・ 正覚院	康応2年	1 (*3)	5 (*16)		6 (*19)
X	下高野・ 天神	文正2年×2基 文明13・15年	4	3		7
Y	上高野・ 金乗院	文明11年	1			1
Z	平戸・ 染谷正行家			1 (題目)		1
a	島田台・ 間見穴遺跡			3 (題目)	2	5

(*) は所在別の総数

2. 下高野 天神の板碑群

「X 下高野・天神」の7基については、本会の2018～2019年の「旧村下高野の総合研究」の際のフィールドワークで、村田顧問にご案内いただく機会があり、3か所の所在地と現状については、把握できていた。現地実見の際、村田顧問に板碑調査データの有無をお尋ねすると、「拓本も採って調査は済んでいる」との回答であったので、いずれまとめて報告されるであろうと思っていた。

本年9月になって、拓本の所在を八千代市立郷土博物館に問い合わせたところ、保存されていることが確認できた。拓本の写真撮影と本誌への掲載は手続きの問題で時間的に間に合わなかったが、現地で撮影した写真との照合は可能であった。

村田顧問が調べられ、『通史編』の「八千代市板碑一覧表」に「X 下高野・天神」欄一行データに、文正2年銘2基、文明13年・15年銘各1基、年号不明3基、計7基と記載されている板碑の現状は、以下のとおりである。

- ・第1地点 畑の脇に「文明15年」銘1基、断碑3基、立てて祀られている
- ・第2地点 畑の脇の墓石の後ろに2基が立ててある
- ・第3地点 土塁の上の「十二所宮」石祠（「齒の神様」）の左横に1基立てかけられてあり、断碑2基が後ろに横にして置かれている。

図1 下高野天神 板碑群 第1地点現状と板碑

		
第1 地点現状 畑の端に、4 基の板碑が、他の石造物と共に集めて、立てて祀られてある。	「文明十三年」(1481) 銘 キリーク b (阿弥陀一尊)・蓮座 45 × 14 cm 1-①	
		
断碑 「文正二年」銘(1467) キリーク b (阿弥陀一尊)・蓮座 上下・表裏逆 33 × 15 cm 2-③	断碑 キリーク b (阿弥陀一尊)・蓮座 39 × 19 cm 1-②	断碑 花瓶の痕跡カ? 39 × 19 cm 1-③

図2 下高野天神 板碑群 第2地点現状と板碑

		
第2地点現状 畑脇の墓石の後ろの塔婆立との間に立てかけられている。	「文明十五年」(1483) 銘 キリーク b・サ・サク (阿弥陀三尊)・蓮座 48×19 cm 2-②	「文正二年」(1467) キリーク b (阿弥陀一尊)・蓮座 上下逆 54×17 cm 2-⑤

図3 下高野天神 板碑群 第3地点現状と板碑

		
第3地点現状 土塁の上の「十二所宮」石祠の横に立てられている。	紀年銘不明 キリーク b (阿弥陀一尊) 46×16 cm 3-①	板碑断片か？

図4 下高野の板碑群の所在地点 航空地図（①～③は板碑群の地点）



3. 上高野 金乗院の板碑

「Y 上高野・金乗院」の板碑については、村田一男顧問が、『史談八千代』第26号(2001年)の「特集Ⅰ 旧村紹介・上高野」の「10 板碑」(注3)に報告している。

以下、板碑本体に関する部分を引用する。

「板碑の寸法は高さ 60.5 cm、幅 22 cm。」「材質は緑泥片岩で、上部は山形をし武蔵式板碑と呼ばれる形式である。板碑の表面には上部に二横線と天蓋と揺らく（垂れ飾り）があり、両脇に沿って線刻が見え、中央にキリーク（阿弥陀如来）、その右下にサ（観音菩薩）、左下にサク（勢至菩薩）とそれぞれ蓮座の上に梵字が彫られ、厨子の中に阿弥陀三尊の種字が納まっているという構成である。銘文は拓本をとって確かめたところ「文明十一年」と判明した。箱の墨書に



図5 金乗院の板碑と箱書きの調査

1999. 6. 21 撮影

「文明五年」というのは肉眼視による誤読であろう。月日や造立者銘などわからないが、中央と左部分に文字らしきものが認められる。」

平成 11 年 (1999) 4 月の本会調査活動でこの板碑に出会った際は、金乗院の須弥壇の中の細長い箱の中にあり、箱の蓋表には「三尊種字彫刻石」と、底裏には「明治三十六年二月秋山新左衛門宅地内ヨリ発掘顕現シタルモノ全 (明治) 三十七年二月十六日金乗院へ入佛ス」などの由緒書が墨書されていた。

1999 年 6 月 21 日、八千代市立郷土博物館に搬入して、拓本を採った。その際の拓影画像を筆者が保存していたので、図 6 に示す。

改めて細部を観察すると、三尊の種字キリク・サ・サクのうち、キリクは異体 (b 類) の種字 (注 4) で、種字・蓮座ともに肉厚な薬研彫りである。

銘文は「文明十一年〈己酉〉／□阿弥禅□／□月□日」と読める。(野口達郎先生のご教示)

その後この板碑は、八千代市立郷土博物館に寄託され、同博物館での 2021 年 7～9 月の「収蔵品展」でも展示公開された。

4. 島田台 間見穴遺跡の板碑群

「a 島田台・間見穴遺跡」の 5 基は、『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 3—八千代市間見穴遺跡—』(注 5) に、間見穴遺跡の「火葬跡」と墓穴と推定される土坑の遺構の状況、武蔵型板碑 5 基の遺構に伴う出土状況および拓本、計測値、銘文などの詳細が掲載されている。

この内容は、『通史編』の第三編第七章第七節「発掘された墓」の中にも、引用されている。

5 基のうち 3 基は「南無法蓮華經」と刻まれた日蓮宗系の題目板碑で、他の 2 基は無刻の断碑である。

図 6 上高野金乗院の板碑拓影



「文明十一年」(1479) 銘
天蓋付 阿弥陀三尊種字板碑
60.5 × 22 cm
八千代市立郷土博物館に寄託

図7 間見穴遺跡の板碑拓影（注5から作図）

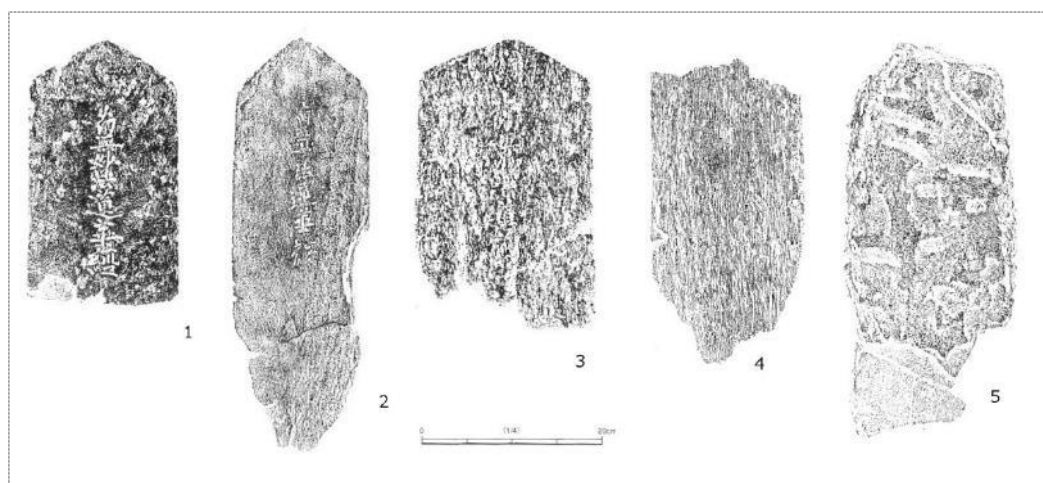


表2 間見穴遺跡の板碑の計測表（注5から引用）

No.	高さ cm	幅 cm	銘文
1	31.0	16.5	南無妙法蓮華經
2	46.0（完形）	15.0	南無妙法蓮華經
3	27.5	19.6	南無妙法蓮華經
4	34.2	16.7	なし
5	36.6	18.7	なし

5. 村上 正覚院の追加分の板碑2基とその他の板碑

「Vの村上・正覚院」の館跡からは、『資料編』に13基の武蔵型板碑が報告されており、『通史編』の一覧表の追加は6基である。

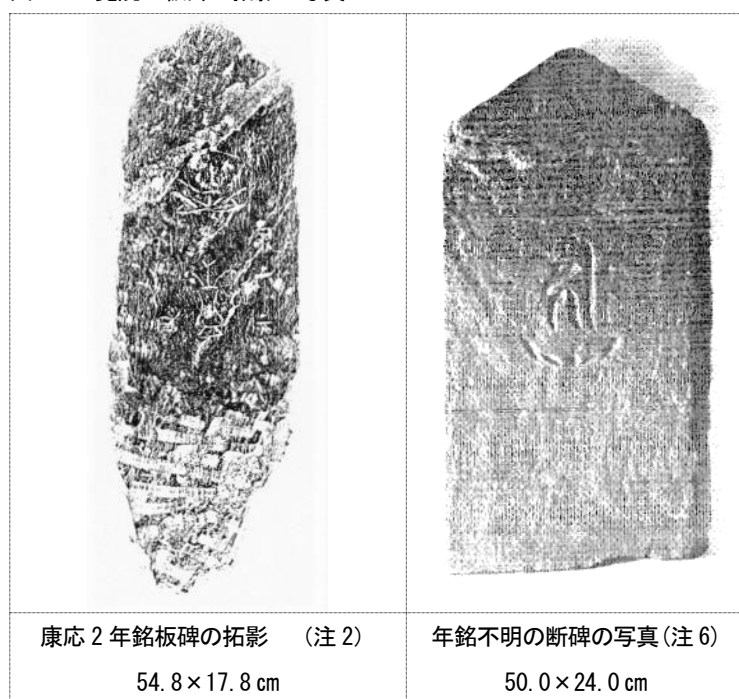
うち紀年銘のある康応2年（1390）銘板碑は、『通史編』の「第二節 市内の板碑」に「蝶型蓮座板碑」として拓影入りで紹介されている。簡略化したされた蓮座と花瓶（けびょう）の形が特徴で、市内での確認は初めての資料である（注2）という。

この康応2年銘の板碑は、平成10年の八千代市歴史民俗資料館の『企画展示図録「埋めて願う」』（注6）にも写真が掲載されている。

またこの『企画展示図録「埋めて願う」』には、もう1点『資料編』にはない正覚院の年不明の板碑の写真が載っている。高さ50cmの断碑で、種字のキリークは、市内で2例目の「キリーク」正体（a類）である（注4）。

なお、正覚院の他の年不明の4点、および「Z平戸・染谷正行家」の板碑1点、計5点については、まだ調査資料の所在などの情報が得られていない。

図8 正覚院の板碑の拓影・写真



おわりに

『通史編』の一覧表にあって、『資料編』にない「幻の25基の板碑」について、今回そのうちの19基のデータを集めてみた。千葉県が調査した間見穴遺跡の板碑以外は、市史編纂に携わっておられた故村田一男顧問がそのほとんどを調べられていたようで、今後、残りの6基の調査データも見つけて、市内板碑の全資料を明らかにしたいと思う。

最後に、銘文釈読にご教示いただいた野口達郎先生、資料の探索にご協力くださった八千代市立郷土博物館の常松成人氏に謝意を表します。

注

- 1 「第2章 九 金石文」『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』八千代市 1991年
- 2 「第五章第二節 市域の板碑」『八千代市の歴史 通史編 上』八千代市 2008年
- 3 村田一男「板碑」『史談八千代』第26号 八千代市郷土歴史研究会 2001年
- 4 蕨由美「八千代市神野の2020年発見板碑群の調査の詳細」の図5 本誌 2021年
- 5 「第5節 中・近世」『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3ー八千代市間見穴遺跡ー』財団法人千葉県文化財センター 2004年
- 6 「正覚院の板碑」『企画展図録 埋めて願う～銭・壺・経筒～』八千代市歴史民俗資料館 1998年